

巻頭言 「データサイエンス教育推進センターの取り組み」	
データサイエンス教育推進センター・センター長 浅井 学……1	
[WLC] WLCの取り組み……2-3	
[GCP] GCPの取り組み……4	
[SPaCe] 2021年度春学期についてのご報告……5-6	
[CETL] CETLの取り組み……7-8	
新任教職員紹介……8	

データサイエンス教育推進センターの取り組み



データサイエンス教育推進センター・センター長 浅井 学

2021年5月、学士課程教育機構のもとにデータサイエンス教育推進センターが開設されました。本センターのミッションは、学生たちが「世界市民として、各学部で学ぶ専門分野において、数理・データサイエンス・AIのスキルを活用した問題解決能力」を飛躍的に高めていけるように寄与していくことです。本稿では、本学におけるデータサイエンス教育の取り組みとして、本学のデータサイエンス教育の特色、文部科学省の認定制度への応募、また最近の取り組みについて紹介いたします。

本学のデータサイエンス教育の特色として、副専攻制度を活用した段階的な学習環境が挙げられます。これは、学生たちの能動的な学びを後押しするもので、学生たちの声からスタートしました。2015年ぐらいからプログラミングに関心をもつ文系学生が増え始め、情報システム工学科の先生たちに多くの相談が寄せられるようになりました。自身の専門分野の勉強もあるなかで、やみくもにプログラミングの勉強をしても効率的ではありません。また文系学生であっても、体系立てて学んでいけば、他学科の科目であってもついていけるようになります。

ここで本センターの前身であるデータサイエンス教育ワーキンググループは、副専攻制度を活用することを学長に提案しました。本学の副専攻は、所属学部以外の分野(学部)から一層体系的かつ深く専門領域を学習できるようにした制度です。学生たちがプログラミングを含め、データサイエンスを体系立てて学べるように、2019年度から副専攻：データサイエンスが設置されました。以来、制度の整備が進み、2022年度生は3つのステップでデータサイエンスを学ぶことができます(下図のステップ0~2)。なお、現在のところ、理工学部情報システム工学科生であれば専門的なデー

タサイエンス・AI教育を受けることができます。その他の学科生が、高度なAI応用力を習得していけるような制度についても、現在検討しています。

さらに本学のデータサイエンス教育の特色として、産学連携科目の設置が挙げられます。2021年度より共通科目「世界市民教育演習：日本IBM共催・データサイエンス演習」を開講しました。2022年度からは「データサイエンス演習：日本IBM共催」として開講されます。この科目では、データサイエンティストを含む企業インターンシップ(社会・民間企業での実践活動)に挑戦をする基礎力をつけることも目標にしています。本年の受講生のなかからも、外資系IT企業などのサマーインターンに合格した学生が出ています。

次に文部科学省の認定制度について紹介します。政府のAI戦略2019では2025年までに、数理・データサイエンス・AI分野について、大学・高等専門学校で学ぶ全ての学生がリテラシーレベルを学べるように、その半数の学生が応用基礎レベルを学べるようにすることを目標に掲げています。これを受けて本年、文部科学省の数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(リテラシーレベル)がスタートしました。本年6月と7月の2回に分けて募集があり、全国で合計78校が認定されました。特に、本学は第1回認定の11校に入ることができました。ご協力またご支援、大変ありがとうございました。

来年には、認定制度(応用基礎レベル)が開始される予定です。この制度は、学生たちが自身の学問分野にデータサイエンスを応用していくための基礎を身に付けることを目的としたものです。本学では、上図のステップ2うち6単位の単位分の内容が該当していますので、応募に向けて準備を進めています。

最後に、最近の取り組みを2点紹介いたします。質保証と最として活用するために、千歳科学技術大学、山梨大学と本学の3校でリテラシーレベルのCBT(computer based testing)を開発中です。これは、本年度中に完成する予定です。また数理・データサイエンス教育強化拠点コンソーシアムの連携校として、本センターとコンソーシアムの共催で10月29日(金)にワークショップ「創価大学におけるデータサイエンス教育：文系学部への展開」を開催いたします。

以上のように本センターは、学内外の方々幅広く連携を持ちながら、本学のデータサイエンス教育の充実に貢献して参ります。

ステップ3 AIを活用して課題解決	専門的なデータサイエンス・AI教育(理工学部情報システム工学科生向け) AI応用力の習得(その他の学科生向け)(準備中)
ステップ2 自らの専門における課題解決	副専攻：データサイエンス
ステップ1 データサイエンス基礎教育	「データサイエンス基礎科目」 データサイエンスの基礎になる科目群8~10単位
ステップ0 全学リテラシー教育	全学必修科目「データサイエンス入門」 (2021年試験開講、2022年度生から1年次必修化)

グローバル・レクチャー・シリーズ

グローバル・レクチャー・シリーズでは、毎回地球規模の問題解決に向け第一線で活躍されている方を講師に迎え、英語で講演を行っていただいている。英語での講演であることから、参加学生の理解を助けるため、WLCでは以下の工夫をしている。

● 事前学習会の開催

講演に関連するビデオを視聴したり、講演の理解に役立つ語彙を学んだりする。

● 上級者向け英会話練習プログラム：イングリッシュ・フォーラムとの連動

講演開催前の一週間、イングリッシュ・フォーラムのディスカッションでは、講演の内容に関連付けたトピックを選び議論する。

● 講演中のディスカッションタイム

講演中、2回ほど小グループに分かれディスカッションしたり、疑問を解消したりする時間を設けている。WLCセルフアクセスプログラムのスタッフにディスカッションをリードしてもらっている。

今後、参加学生には、これらの準備プログラムに参加した上で、講演に臨んでいただきたい。また、当日は、ディスカッションタイムにて、疑問を解消したり、議論をしたりして理解を深めていただきたいと願っている。

さて、第18回グローバル・レクチャー・シリーズは、英国ケンブリッジ大学よりヒラリー・クレミン博士をお迎えし講演いただいた。クレミン博士は、ケンブリッジ大学教育学部にて教鞭を執り、学校・地域における平和教育や紛争移行の研究と執筆活動も行っている。今回も参加学生の理解促進のため、事前学習会を開催し、イングリッシュ・フォーラムと連動した。事前学習会では、博士のビデオを見て、クレミン博士について知った上で、講演に関連する語彙を学んだり、質問会が行われたりした。講義開催の前週にイングリッシュ・フォーラムでは、学生が講義のトピックに慣れ親しみ、自分の意見を言う練習ができるよう、教育・平和関連のトピックを選び議論した。

“学校における積極的平和：平和維持から平和形成・平和

構築へ”と題したクレミン博士の講演には100名以上の学生・教職員が参加した。講演前半で博士は、平和へと繋がる建設的対立と暴力を特徴とする破壊的対立の違いについて説明した。次に、積極的平和と消極的平和の違いについて説明した後、3種類の暴力（直接的・構造的・文化的）に言及した。

平和をもたらす3つの方法（平和維持・平和形成・平和構築）が説明された後、Zoomのブレイクアウトルームにて学生同士のディスカッションが行われた。ディスカッションで学生は、博士から与えられた積極的・消極的平和に関する3つの質問について討議し、学校での構造的・文化的暴力の具体的な例について考察した。講演の後半には、3種類の暴力に関してより具体的な特徴が説明され、学校内での直接的・構造的・文化的暴力の例もいくつか取り上げられた。博士はさらに学校での紛争移行（iPEACE）モデルの6つの構成要素について説明し、学校で積極的平和を実現させるために効果的な対立解決に関して詳しく解説した。2回目のブレイクアウト・セッションでは、学校での平和維持・平和形成・平和構築に関する質問や対立解決のiPEACEモデルの利点について学生同士で討論した。

講義を終えるにあたり、クレミン博士は修復的アプローチで重要となるいくつかの問題を考察し、学校で平和的に対立解決を行うための5段階の仲裁過程を提案した。また、本学生からの質問にも快く答えてくださった。参加者アンケートの結果は非常に良好で、大変興味深く、多くを学ぶことのできたクレミン博士によるグローバル・レクチャー・シリーズは成功裏に終わった（Jamie Purdon）。

プロフェッショナル・ディベロップメント (PD)

2021年度春学期WLCでは、オンラインPDセッションを計3回開催した。昨年度の主なテーマはオンライン授業において活用できるテクノロジーについてであった。今年度はヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）についてと、実践的な授業のテクニックを扱うセッションが行われた。

WLCのランドル副センター長は2年前より複数のWLC講師とCEFRの共同研究及び共通科目英語科目Englishへの導入を進めている。カリキュラムへの導入は段階的に進められており、第一段階では教員のCEFRについての理解を深めること、第二段階では学生を対象としたニーズ分析に焦点があてられた。第三段階に入った今年度、5月5日・6日のセッションで、ランドル副センター長は、共通科目英語科目Englishを対象にCEFRをどうカスタマイズするかについて紹介した。CEFRの内容はそのままでは教育現場に適用できないこともある。共通科目英語科目Englishにあっては、科目の特性や学生のニーズに合わせ、教員自身が



Can-Doリストをカスタマイズする必要がある。今回のセッションでは、教員がどのようにCan-Doリストをカスタマイズすればよいか実際に体験した。

第2回PDセッションが5月26日、CEFRの活用における著名な研究者である茨城大学教授の永井典子先生を招いて行われた。参加した教員は5月5日・6日のセッションで事前にCEFRのカスタマイズについて説明を受けていたため、永井先生からより具体的な知識を速やかに得ることができた。また各々の授業での活動（リーディング・ライティング・リスニング・スピーキング）で使用されるCan-Doリストのカスタマイズも体験した。

第3回目のPDセッションは6月16日にプレゼンテーションの形式で行われた。プレゼン講師は、Google Classroomを使用する際の基本的な授業管理テクニックを紹介した。それには、成績管理表の設定方法・課題管理・採点等の便利な機能が含まれていた。マメ助教は、M-Readerの効果について述べた。M-Readerを利用することにより、教員は学生が読んでいる読み物を学期中把握することができる。共通科目のEnglishでは物語を読むことが重要視されており、マメ助教はこのプログラムによって教員がどのように学生の読書の進捗状況を把握できるかについて具体的に説明した。最後にカーン助教はオンラインプログラム、Turnitin（ターンイットイン）の活用方法を学生と教員の両方の視点から紹介した。

新型コロナウイルスの世界的大流行が従来の学習環境へもたらした影響を鑑み、WLCは教員一人一人の学びや指導技術の向上を促進し、次世代のリーダーとなる本学学生によりよい学習環境を提供できるよう努力を重ねている（Forrest Nelson）。

オンライン授業の取り組み

ハングル

昨年度の春学期、初めてのオンラインによる授業に対応するため、履修者が多い「ハングルⅠ・Ⅱ」の担当教員で毎週のようにZoomでミーティングを持ち、相談しながら

進めた。今までにない授業運営であり、小テストの実施方法や評価なども含め意見を交換し共有した。オンライン授業に対応しながら授業改善を図る貴重な機会になり、その経験が本年度春学期の授業でも活かされている。

「ハングルⅠ・Ⅱ」を履修する学生はほとんどが1年生であり、新入生が外国語を学ぶ楽しさや大切さを感じられるように工夫を重ねた。ハングルは基礎段階で文字と発音を習得することが肝要であり、オンライン授業ではパワーポイントを例年以上に丁寧に準備した。またペア・グループワークにより学生同士で語彙や短文を音読したり、復習プリントで「書く練習」を課題にしたりして定着させた。さらに韓国の文化や歴史を紹介する時間を設けた。各クラスとも履修した学生が到達目標を達成したと実感している。

フランス語

2020年度よりフランス語においてもオンライン授業を実施している。通信環境や目の疲れ等問題も多かったが、学生の集中力を維持し、モチベーションを高めるため授業を10分毎に区切って計画し、インプットとアウトプットのメリハリを大切にす等の工夫をして授業の質を維持できた。具体的にはZoomのホワイトボード、チャット、ブレイクアウト・セッション等を使い、目的に応じて、一斉・グループ・個別指導を使い分けた。視聴覚教材を用いたりリスニング練習もした。発声練習はイヤホンを利用するので学生はよく集中していた。学期後半より、フランス文化について日本語または英語でのグループ・プレゼンテーションを行い、フィードバックをポータルサイトのフォーラムに書かせる機会を設けた。筆記小テストはGoogleフォームを利用し、口答テスト、会話とショートスピーチは授業内で行った。今後対面授業においても、デジタルネイティブ世代を意識し、細かな授業設計による切替えの早いテンポ、多くのビジュアル刺激、ポータルサイトやGoogleのツール利用等、多様な授業方法を活用していきたい（Marcella Morganti）。

■WLC 教員の紹介 ウィリアム・スナイダー教授



米国出身のウィリアム・スナイダー教授はウェズリアン大学にて言語学・ロシア語及びロシア文学の文学士号を取得後、ノースウェスタン大学にて第二言語習得を専門とした言語学博士号を取得した。教授は2020年本学に着任し、主に大学院修士課程英語教育専修において「第二言語習得理論」「語用論」「アカデミックライティング」を担当し、教育実習や修士論文指導にも携わっている。研究分野は、対面及びオンラインで行

われる言語クラス内の教員と学生の関与についてであり、現在、米国・キルギス共和国の研究者と共にオンライン上でのコミュニケーションの媒介に関する研究プロジェクトを行っている。同時に、日本の研究者と共に大学の言語科目非常勤講師を対象に、2020年度における緊急のオンライン授業実施経験に関する研究を進めている。スナイダー教授はまた、WLC助教が創価大学、および将来経験する教育現場においてより効果的に授業を行うことができるよう支援していきたいと考えている。

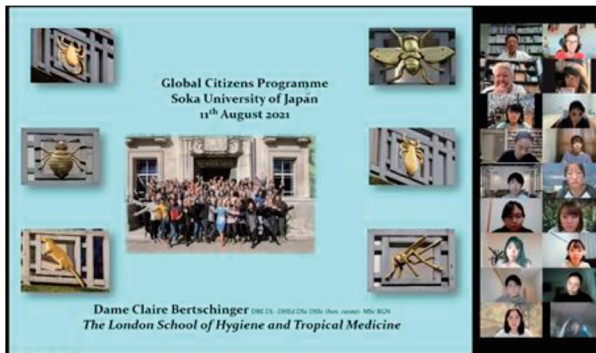
グローバル・シティズンシップ・プログラム 地球市民特別講演・懇談会の開催

グローバルシティズンシッププログラム
ディレクター 佐々木 諭

グローバル・シティズンシップ・プログラム(GCP)は、夏季休暇中に国内外の識者による地球市民に関するオンライン特別講演を4回にわたり開催しました。GCP1年生、2年生を中心に多くの学生が参加し、地球市民について深く考察する学びの機会となりました。

第1回目は、8月11日にロンドン大学熱帯医学研究科ディプロマコース・ディレクターのクリア・バーチンガー博士による講演と懇談会を行いました。バーチンガー博士は、赤十字国際委員会の看護師として紛争地域の医療援助活動に長年携わり、その活動が高く評価され、英国よりデйм・コマンドーの爵位を受勲されています。

講演では、アフガニスタン、エチオピア、ウガンダでの活動を紹介されながら、目の前の一人の命を救うことに献身的に尽くされたこと、相手がどのような立場であれ、誠実に接することで信頼を広げ活動の道を開かれてきたことを語られました。講演後には学生の質問一つひとつに丁寧に答えられ、参加した学生からは、「バーチンガー博士の命を守るための情熱と人に対する共感に強く感銘しました」「地球市民として学び続けること、信条や価値観が異なる人に対しても誠実な態度で接することの重要性を学びました」などの感想が寄せられました。



クリア・バーチンガー博士(写真右上)による講演会。50名を超えるGCP生が参加しました。

8月24日は、フィリピン共和国のイースト大学カロオカン校のリナル・サラマト教授とゾシモ・バタッド学長による講演と懇談会を開催しました。GCPは、毎年2月にフィリピンで海外短期研修を実施しており、イースト大学カロオカン校へ訪問し、イースト大学の学生とも交流をしています。本年は新型コロナウイルスの影響もあり、研修の実施を延期しているため、研修に代わる貴重な学びの機会となりました。

サラマト教授は、フィリピンの歴史的偉人であるホセ・リサルに関する講演と質疑を行い、バタッド学長は本学創立者とイースト大学の交流の歴史を紹介され、地球市民を目指し勉学に挑戦するGCP生を温かく激励されました。

8月27日には、玉川大学教育学部小林亮教授より、「地球市民教育の潮流と地球市民の資質」と題する講演と懇談会が開催されました。講演では、地球市民の歴史を概説され、地球市民

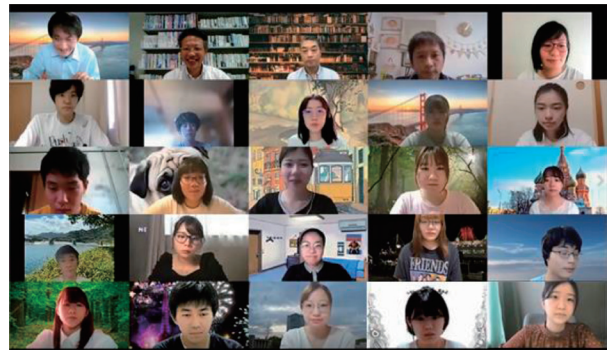


イースト大学講演会には、バタッド学長、サラマト教授、本学フィリピン事務所職員らが参加されました。

性の育成をとおり、多様性を尊重し、対立を和解へと転じる能力を強化することの重要性を語られました。参加した学生からは以下の感想が寄せられました。

「地球市民としての資質から、地球市民性を浸透させる学習領域や葛藤解決能力をはじめとするスキルなど、地球市民に成長し、連帯の輪を拡げていく上で重要な要素を解説してくださり、とても参考になりました。解決困難な課題であっても、当事者意識を持ち、対話的姿勢に基づき、草の根レベルでの対話・交流を止めないことが重要であり、これからも国際社会の一員として、『できること』を探し、行動に移していく決意を深める機会となりました。」(経済学部4年)

「地球市民教育と聞くと、少し遠いものとして認識しがちですが、子供から大人まで全ての人が学び、地球市民性を身につけていくことが、国際的な問題の解決だけでなく、地域的な身近な問題の解決、地域の繋がりを育むことにもつながることを学びました。」(法学部1年)



小林亮先生(写真左上)による講演会。学生からの多くの質問にも予定時間を越えて丁寧に答えていただきました。

また、上記の講演会に加え、8月14日は、アジア開発銀行に勤めている本学卒業生の上田剛さん、帯刀良信さんとキャリア懇談会を開催しました。これら特別講演、懇談会は、地球市民への志向性を強め、勉学に一層挑戦するモチベーションを高める機会となりました。



2021年度春学期についてのご報告

2021年度春学期も新型コロナウイルス感染防止のため、2020年度に引き続きオンラインサービスを行いました。ここでは、春学期のSPACeの取り組みについてご報告します。

ヘルプデスク

ヘルプデスクでは、2020年度に引き続き、2021年春学期のサービスをオンラインで実施しました。主な業務は単発で行われる個別の学習相談やピア・サポートと呼ばれる継続的に行われる学習・自己管理相談、および、学習セミナーの開催です。

学習相談は、昨年度は5月にサービスを開始しポータルからの予約のみで実施しましたが、オンラインサービスも2年目に入りスタッフが学期当初から対応できるようになったため、利用者の利便性を考慮して予約による学習相談の他に、飛び入りによる相談も開始しました。春学期の利用数は124件と昨年比で2割程度増加しました(表1)。内訳を見ると、4月の履修相談の件数が突出して多く、自己管理(タイムマネジメント)、課題・試験対策、

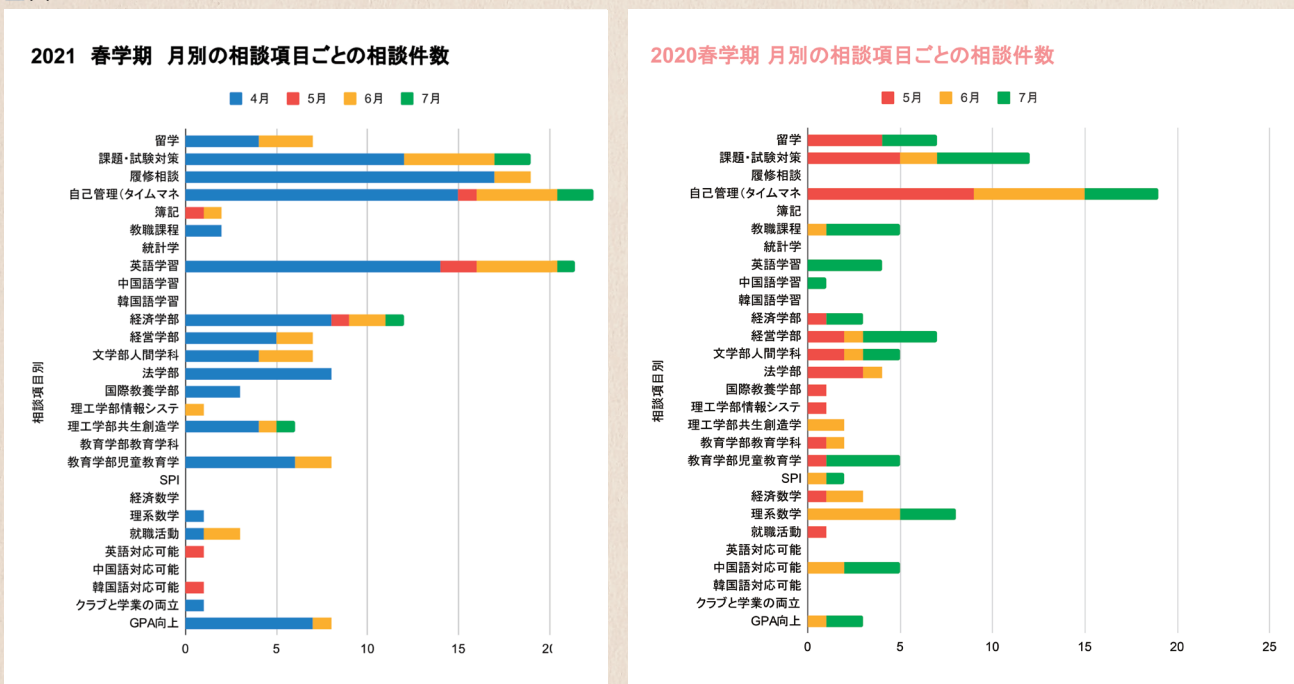
英語学習などの相談は学期を通じて多いことが分かりました(図1)。ピア・サポートは学期の初めに利用希望者を募集し、面談の上、14名が学期にわたって継続的に本サービスを利用しました。利用者アンケートから、「自分の状況にあった学習計画を立てる力」や「計画を立てて自己を振り返る習慣がついた」と感じている利用者が多いことが分かりました。

学習セミナーは、表2に示す6件のオンラインセミナーが行われました。いずれも学生のニーズを捉えた学生目線のセミナーで、述べ290名が参加しました。参加者の分析から、ポータルでの告知の他にInstagramなどのSNSでの告知でセミナーを知り、参加したという学生が多く見られました。

■表1 2021年度春学期 ヘルプデスク学習相談利用者(人)

2021春学期	4月	5月	6月	7月	計	2020春学期	前年比
予約	45	25	14	4	88	104	1.2
飛び入り	27	5	3	1	36		
計	72	30	17	5	124		

■図1 学習相談項目の比較



■表2 2021年度春学期 ヘルプデスク学習セミナー利用者(人)

セミナー	実施日	参加者数	参加者内訳				
			1年生	2年生	3年生	4年生	その他
ICT	4月30日	17	14	2	1	0	0
簿記	5月 5日	33	8	14	5	3	3
レポート作成	5月21日	54	48	2	3	0	1
タイムマネジメント	5月28日	58	24	7	4	4	19
試験対策	6月25日	74	47	22	5	0	0
SPI対策	6月30日	54	2	5	42	5	0
	計	290	143	52	60	12	23

日本語ライティングセンター

日本語ライティングセンター（JWC）では、レポートチュータリング、レポート診断、学習セミナー、図書館連携イベントなどの全てのサービスを2020年度に引き続きオンラインで行いました。

レポートチュータリングの利用件数は252件と昨年並みでしたが、レポート診断は163件と昨年の2倍以上の利用がありました（表1）。特に、中間レポートと期末レポート作成時期に利用者が急増しました。

■表1 2021年度春学期 JWC利用者

2021春学期	4月	5月	6月	7月	計	2020春学期	前年比
レポートチュータリング	2	90	93	67	252	245	1.0
レポート診断	0	66	12	85	163	74	2.2
計	2	156	105	152	415	319	

学習セミナーとしてはレポート作成に関わるWordの使い方のオンデマンドコンテンツをポータルで公開したことに加え、5月と6月にレベル別の文献検索セミナーを、中間レポートと期末レポートの時期には「レポートお助け隊」を実施し、述べ130名が利用しました。（表2）。

JWC図書館連携イベントとしては、外部講師を招き宮沢賢治

の作品を取り上げた朗読のイベントが行われました。朗読は一種の身体表現であり、参加者の評価も高かったことから、今後は学内のみならず、高大連携や地域連携型のイベントにも展開できる可能性を感じました。加えて、『13歳からのアート思考』を取り上げ、学生がファシリテーターを務めるアクティブ・ブック・ダイアログも開かれました。

■表2 2021年度春学期 JWC学習セミナー

セミナー	実施日	参加者(人)
Wordの使い方 ※動画配信	4月	—
文献検索 初級編	5月10日	73
レポートお助け隊	5月17日	10
文献検索の森に分け入るその前に スタートアップ編	6月 9日	16
文献検索の森に分け入る 中級編	6月23日	19
レポートお助け隊	7月 5日	12
計		130

■表3 2021年度春学期 JWC図書館連携イベント

イベント名	実施日	参加者(人)
朗読ワークショップ 宮沢賢治作品集	6月26日	14
朗読実演と解説	6月26日	12
active book dialogue 『13歳からのアート思考』	7月 7日	23
計		49

調べごと相談

「SPACe調べごと相談」のコーナーでは、レポートや卒論の参考文献検索、データベースの利用方法、その他の調べごと等の相談に応じるレファレンスサービスを行っています。（週3日間／一日3時間）

今年度（2021年度）も、大学の感染症対策に伴うオンライン授業に対応するため、4月（4月は下旬のみ）より、オンラインレファレンス（①オンラインWeb会議システムでの対応、及

び②メールでの対応）を行っております。オンラインによるサービスが2年目で業務も安定してきたことから、春学期の質問件数の合計は昨年度から微増（1.04倍）しました。

今後もオンラインサービスを継続しつつ、社会状況や学内の状況を踏まえて適したサービス体制を検討し実施していく予定です。

■ SPACe調べごと相談（レファレンス）利用者数／2021年度春学期

	4月	5月	6月	7月	春学期	計
学術文章作法	1	14	21	4	40	73%
演習（卒論）	1	1	1	0	3	5%
その他	4	1	3	4	12	22%
	6	16	25	8	55	

CETLは学士課程教育機構の教育支援組織として、FD/SD委員会や教務課と連携して様々なFDイベントを企画・運営しています。以下、2021年度上半期の活動報告です。

2021年度 学士課程教育機構FD・SDセミナー

■ 第1回FD・SDセミナー

2021年4月7日(水) 16:40~18:00、Zoom Video Communicationsの片山旭氏にご担当いただき、「Zoom講座 (基礎編・応用編)」と題して本年度第1回学士課程教育機構FD・SDセミナーを開催しました (Zoomでのオンライン開催)。



片山氏

ミーティングとウェビナーの違い、ミーティングのスケジュール設定、ミーティングコントロール (セキュリティ機能等)、チャット (小テスト)、投票機能 (インタラクティブな授業作り)、レポート機能 (出席確認) など、Zoomの多い機能からポイントを絞っての便利な機能の紹介があり、参加者にとって多くの有益な情報が得られました。

88名 (本学教職員) の方にご参加いただき、「まだまだ理解していなかった機能を知ることが出来ました」「投票機能を活用したグループ分けや、チャットを使用した小テスト等を授業で取り入れたい」「自分のスキルをアップデートできるように、今後もセミナーがあれば参加していきたい」等の声が寄せられました。

■ 第2回FD・SDセミナー

4月24日(土)に予定していた第2回セミナーは、コロナウイルス感染状況を鑑みて、延期 (時期は未定) となりました。

■ 第3回FD・SDセミナー

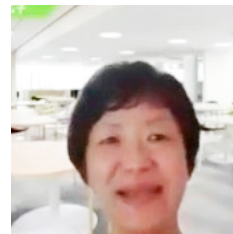
5月21日(金) 16:40~18:00、学士課程教育機構の佐藤広子准教授、高橋薫准教授、康潤伊助教の3名の方を講師に、第3回FD・SDセミナーを開催しました (Zoomでのオンライン

開催)。

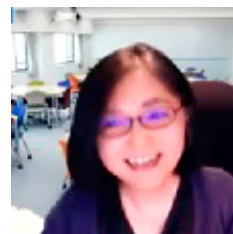
「剽窃チェックソフトの活用 (学術文章作法の事例紹介)」と題して、剽窃チェックソフト「Feedback Studio」の導入経緯と効果、授業における具体的な活用方法 (類似評定結果の教育的な活用法等)、具体的な操作 (「Feedback Studio」を用いたフィードバック法) についてご説明いただきました。

ソフトの導入及び教育的活用を通して、学生の研究倫理に対する意識を高めることができたこと、レポートの最終稿 (採点時) においても活用ができ、ルーブリックを登録することにより自動で採点ができること等の紹介もあり、参加者にとって多くの有益な情報提供になりました。

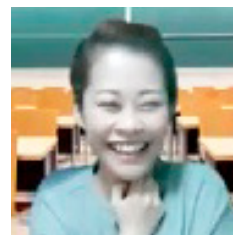
92名 (本学教職員) の方にご参加いただき、「ソフトの利用によって、学生がより良いレポート作成に取り組むツールとなっていることが興味深かった」「実際の授業や課題の評価・採点に活用していきたいと思いました。」「システムを活用できるように使い方をしっかり学習したい。」等の好評を得ました。



佐藤准教授



高橋准教授



康助教

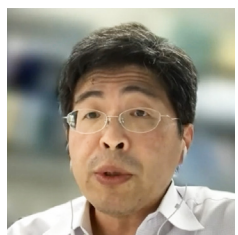
2021年度 新任教員スタートアップセミナー

5月8日(土) 10:00~12:00、オンラインにて第1回新任教員スタートアップセミナーが開催され、2020年9月以降に採用された新任教員13名が参加しました。

田中亮平副学長による「創立50周年を迎えて一創価大学グランドデザイン2021-2030」の講話では日本の高等教育の動向を背景に、本学のグランドデザインを中心とした様々な取り組みと展望を確認しました。続いて西浦昭雄教務部長による「本学における授業運営の諸課題 ー多様な学力レベルの学生対応を中心にー」の講義では、近年の大学入学者の変化や、その特徴、また授業を行う上での様々な注意点や課題等について学びました。その後、関田一彦SPACeおよびCETLセンター長による「創価大学における教育・学習支援サービス」の紹介では、本学で提供している各種サービスの概要などの話がありました。



田中副学長



西浦教務部長

参加者からは、「教員として学生にどのようなサポートをすることができるのか、認識を深めることができた。」「どこに相談すればよいか分からない事案があったが、困ったとき

に相談する先、窓口などがわかった。」「国全体としての教育の方向性や、大学として今後目指していくビジョンなどについて学ぶことができた。」などの声が寄せられました。

続いて、7月24日(土) 10:00~11:30、オンラインにて第2回新任教員スタートアップセミナーが開催され、2020年9月以降に採用された新任教員20名が参加しました。

田中亮平副学長による開会挨拶の後、新任教員を代表して、ガウタム・プラカシ 経営学部助教による「新型コロナ中での授業経験」、服部南見 学士課程教育機構講師による「世界市民を实践する ー少人数演習科目における協働学習ー」の2件の実践報告がありました。それぞれの報告について活発な質疑応答が行なわれ、最後に西浦昭雄教務部長より閉会の挨拶がありました。

参加者からは、「他の方の授業の取り組みやティップスなどを聞くことができ、自身の授業改善に活かしていけると感じた。」「授業の目的などを具体的に枠組みで設定して、見える化し、学生に配慮した授業運営をされていることはとても参考になった。」「授業設計や評価方法など、学生がどうやったら伸びるかという工夫をされていることは学びになった。」などの声が寄せられました。



関田SPACe・CETLセンター長

ティーチング・ポートフォリオ研修

本学では昨年度第3回FD/SD委員会の議を経て、今年度から3年間かけて、全教員に簡易版のティーチング・ポートフォリオの作成を求めて行くことになりました。この取り組みを具体的に進めるためにCETLでは、7月30日13:00~15:30、関田一彦CETLセンター長を講師にティーチング・ポートフォリオ作成のためのメンター研修を開催しました。各学部からポートフォリオ作成を支援する教員に集まっていただき、感染防止に十分配慮しながら対面で実施しました。

研修では、ティーチング・ポートフォリオの概要やその目的、また本学で今後推進するポートフォリオの特徴、ポートフォリオの取り組みを進める中でメンターが担う役割や実践の方法などを、グループワークを交えながら学びました。

グループワークを通じて、参加の各教員が作成したポートフォリオの振り返りやフィードバックなどを相互に行い、活発な質疑応答などを通じて、実際にメンターとして活動をしていく上での注意点や、意識すべき点などを詳細に確認することができました。

ご参加いただいた18名の教員からは、「ティーチング・ポートフォリオに関する知識を深められ、またワークを通じてメンターとしての役割を理解することができた。」「自身の担当する授業を理念や目的まで振り返って確認する機会がなかったので、新しい発見があり、とても学びのある良い機会になった。」等の声が寄せられました。



関田CETLセンター長



研修の様子

2021年度 ファカルティ・ディベロッパー研修

本年度、創価大学は大学基準協会の認証評価を受審します。その準備の過程で、学部自身が行う自己点検評価を踏まえた、教育改善のためのアクションプランを企画・推進する学部内のFD担当者の働きが非常に重要になっています。そこで、文科省認定の教育職員能力開発拠点である愛媛大学の教育・学生支援機構教育企画室の協力を仰ぎ、秋学期開始を前に、9月4,5日の2日間、ファカルティ・ディベロッパー研修を開催しました。(Zoomによるオンライン開催)

冒頭、関田一彦CETLセンター長より、ファカルティ・ディベロッパー研修の趣旨説明として、本学でのFDの歴史と現状について説明があり、研修の前提となる認識を確認しました。

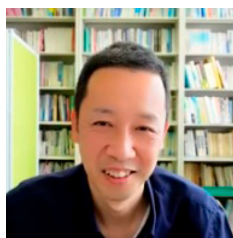
続いて、講師である愛媛大学の中井俊樹教授、竹中喜一講師からは、FDの起源やその歴史、国内における動向や施策の意義、また具体的なFDイベントの企画・立案など広範な内容を、ワークを交えながらご講義いただきました。学部教員の能力開発を主体的に実施していく上で、必要な視点や実践におけるティップスなど、様々な教育理論を基に理解を深めることができました。さらに、FDで対応可能な範囲の限界や、他の施策との有機的な連携の必要性、今後本学で推進するティーチング・ポートフォリオについての概要説明も行われ、参加者にとって多

くの有益な情報が得られた研修となりました。

両日合わせて19名(本学教員)の方に参加いただき、各学部のFD推進者育成が大きく前進しました。参加者のアンケートには、「FDの意義と今後の自分の学部での使命が明確になりました。」「学部のFDの特徴や課題を振り返ることができ、今後の企画案も一緒に作成することができとても建設的でした。学部では知りえない他学部の取組を紹介してもらい、参考になりました。」等の声が寄せられました。



愛媛大学 竹中喜一講師



愛媛大学 中井俊樹教授



講義の様子

学士課程教育機構 新任教職員紹介

WLC 助教…………アレクサンドル・グトコフスキー
助教…………ベン・フィー・タン



創価大学

創価大学学士課程教育機構ニュースレター [SEED] 第22号
発行日 2021年10月29日
発行者 創価大学学士課程教育機構
〒192-8577 東京都八王子市丹木町1-236
<https://www.soka.ac.jp/seed/>